

福井市泰澄寺のハチ——生態的遺物

常 木 勝 次

The Taichôdzi Temple — An Ecological Relict in the City of Fukui

By K. TSUNEKI

タナカマエダテバチの雄発見さる

K. Tsuneki: The male of *Psenulus tanakai* Tsuneki

生物研究 (福井) 第 XIII 卷 第 3-4 号 58~62 頁別刷

Reprinted from The Life Study (Fukui), Vol. XIII, Nos. 3-4, pp. 58-62

October 30, 1969 *i, j*

福井市泰澄寺のハチ — 生態的遺物

常 木 勝 次

The Taichôdzi Temple — An Ecological Relict in the City of Fukui

By K. TSUNEKI

The advancement of industry and the propagation of the civilized life exclude the Nature even from the rural city. In such an environment the Taichôdzi Temple is an ecological relict. Well protected by the belt of dense wood and religious people the ground of the Temple nicely reserves the old fauna which now can not be met with in its vicinity and which is now reserved in the montanic region only. In the following list of the fossorial wasps collected within the ground of the Temple the species with an asterisk represents such a form.

In this paper the following new subspecies is described:

Rhopalum (Rhopalum) hakodatense taichodzi subsp. nov.

Rhopalum (Rhopalum) sect. Rhopalum) hakodatense Tsuneki, Akitu, 9 (3.4): 51, 1960.

In the new subspecies: Petiole shorter and stumpy. Ratio between length to maximum width 28 : 10 (in typical race 32 : 10.5), and between maximum and minimum width 10 : 5.5 (in typical race 10.5 : 5). Pygidial area not inclined toward the median line, but elliptically concave. ♂ Unknown.

Holotype: ♀, Taichodzi, Fukui, 5. VI. 1967, K. Tsuneki leg.

Paratypes: 2 ♀♀, the same place, 13. VI. 1967; 7. VI. 1968, K. Tsuneki leg.

工業化の進むと共に大都市からは自然がしだいにしめだされていくが、いなかでも、いわゆる開発が進み、いわゆる文化が浸透するにつれて自然は破壊され、われわれの手もとから遠のいていき、遠のくことのできぬものは消滅し絶滅してしまう。

私が福井へきたころは、それはわずか十数年前にすぎないのであるが、どこの村落にもかやぶきの家がたくさんあった。そこには多種多数の管住性のハチが住み、その寄生者が群れ、そこに自然の調和が見られた。よそでは高地か山奥にでも行かなければ見られないような珍種が、数多く手近に住んでいることは、私をこの上もなく喜ばせたものである。文珠山をめぐる諸部落を対象とした青蜂類の微分布調査ができたのも、そういう事情のもとにあったからである。

ところが、いまはすっかり変わってしまった。福井の周辺はもとより、かなりの山手に入ってさえ、かやぶきの家など、捜さなければ見つからないか、捜しても見つけることはできないような状態になってしまった。虫穴のたくさんあいている柱や横木を使ってある古い家はことごとく取りこわされ、農家はどこも新建材と新しい塗料で飾られた御殿に変わってしまったのである。御殿にはハチは住めない。だから、この山の周りで、青蜂の微分布調査をした、と言っても、それは大昔のことのように思われるのである。それだけではない。目先の税収の増加だけを考える小為政者たちは、先を争うように工場を誘致した。それに伴う山林の伐採・整地、道路の建設、車の洪水、かくして福井の郊外地域も騒音と悪ガスに満たされ始めたのである。

いなかの自然破壊にもっと悪い役割を演じているのは、いわゆる農薬の普及である。この農薬の散布によって、実に多数の種が私たちのそばから姿を消してしまった。このことは、昔の野の自然を知る人なら、だれでも痛切に感じることであろう。

以上の三悪の重複することによって、福井県のいなかも、とくに福井市の郊外地域は、昆虫愛好者にほとんど魅力のない、つまらぬ土地になり下がってしまいつつあるのである。

ところが、その荒廃した自然の中であってオアシスのように、昔の面影をとどめている所がある。それが泰澄寺だ。この寺は福井市三十八社町にあり、北陸仏教の開祖と言われる泰澄大師生誕の地に建立されたと伝えられる。この寺は古い堂宇を持ち、広大な境内のよく茂った樹木によって周囲から隔てられ、そこに住む自然を、昔のままに保っているのである。

私が福井県へ移ってきたころ、私はこの寺の近くに住んでいた。日曜日には、この寺を含めて路傍の農家や、その後方に連なる台地や丘を私は歩きまわって、数多くの珍品を得ていたものだ。その後私は福井旧市内へ移り住むようになり、この寺の周囲にもいくつかの工場がたち、後方の台地も拓かれ、前方50mに国道8号線が走るようになって、その付近の様子は、以前とすっかり変わってしまった。だが寺の境内は余り変わらず、昔のままの広場、湧水、巨木、坂、池、境内を囲む茂った林、巡拝仏などが、そのまま残されている。新しくなったのは奥の院だけで、本堂と鐘殿は恐らく200余年を経たものではないかと思われる古さである。

この寺の境内で私は以前学生の1人とアリのテリトリー(日本生態学会誌, 1957)の研究をし、最近ではサトジガバチの生態の研究(本誌, 1968)を行なった。また隔年ここを訪れて、学生たちにアリの行動・生態の観察をさせることが、このころの習いになっている。私は以前から、ここに住むハチ類の珍しさに興味をもっていたので、自身毎年数度ここを訪れ、彼らを絶滅させないように配慮しながら、少しずつ標本を集めてきた。それらの中には以前は付近の農家にも住んでいたのだが、いまはここだけしか見られぬというのが少なくない。泰澄寺は泰澄大師の遺跡を1千数百年にわたって伝えていられる古刹だが、昆虫分布の昔の面影をそのままに伝えるという点では、生態学上の生きた遺物—relict—でもある。以下のリストを読まれる方々の中には、来春早々にここへ出かける人もあるかと思うが、どうか濫獲を慎んで、この生態学上の生きた遺跡を、ちょうど高山植物を守るように、保護していただきたいものと思う。

リストおよび解説

(*を付したものが、平地ではレリクト的意義をもつ種である。)

1. *Sphex (Isodontia) nigellus* Smith コクロアナバチ
この種は現在でも付近に普通に見られ、福井市内でも誘い筒を設けると、よく造巣する。
2. *Ammophila (Ammophila) sabulosa nipponica* Tsuneki サトジガバチ
狭い範囲に数巣を造り、重複同時貯食を行なうということが見られたのは、これまでのところ、ここだけである。
3. *Sceliphron inflexum* Sickmann ルリジガバチ
この種は福井県では、平地の人家付近には、多くない。ここでも境内の花木に来るが少ない。
- *4. *Sceliphron (Sceliphron) deforme* (Smith) モンキジガバチ
モンキジガバチも福井県では山地の住者である。低山帯でも谷間の部落などにはよく見かけるが、市内ではほとんど姿を見ることのない種である。
5. *Liris (Nigliris) japonica* (Kohl) ヒメコオロギバチ
早春から初夏にかけて本堂裏の広場に造巣している。
6. *Trypoxylon pacificum* Gussakovskij コシブトジガバチモドキ
7. *Trypoxylon varipes* Pérez マドラジガバチモドキ
- *8. *Trypoxylon clavicerum exguum* Tsuneki ケシジガバチモドキ
福井県の山間部落では、きわめて多い普通種だが、福井付近の平地では見られない。泰澄寺には、たくさん住んでいる。
- *9. *Pison (Krombeiniellum) koreense* (Radoszkovsky) チョウセンピソ
この種に関する文献は次のようである。
Paraceramius Koreensis Radoszkovsky, Horae Soc. Ent. Ross., 21 : 433, 1887.
Ceramius Koreensis: Dalla Torre, Cat. Hym., 9 : 3, 1894.

- Pison koreensis*: Kohl, in Dala Torre's Cat. Hym. etc., 8 : 712, 1897.
Pison (Pisonoides) koreensis: Turner, Proc. Zool. Soc. London, 1916, p. 617, 1916.
Pison (Pisonoides) koreensis: Yasumatsu, Ann. Zool. Jap., 15 (2) : 229, 1935.
Pison (Pisonoides) koreensis: Yasumatsu, Festschr. E. Strand. 5 : 83, 1938.
Pison (Pisonoides) coreensis (!): Tsuneki, Hachi, 9 : 28, 1954.
Pison (Paraceramius) koreense: Krombein, Ent. News, 69 (6) : 166, 1958.
Pison (Paraceramius) koreense: Krombein, U. S. Dept. Agr. Monogr. 2. Suppl. 1, 189, 1958.
Pison (Pisonoides) coreensis (!): Togashi, Life Study, 6 (3) : 41, 1962.
Pison (Krombeiniellum) koreensis: Richards, A revisional study of the Masarid wasps. Brit. Mus. Nat. Hist. p. 118, 1962.
Pison (Krombeiniellum) koreense: Krombein, Proc. Biol. Soc. Wash., 76 : 273, 1963.
Pison (Krombeiniellum) koreense: Tsuneki, Life Study (生物研究), 8 (3) : 49, 1964.
Pison (Pisonoides) koreensis: Iwata, Mushi, 38 (1) : 1, 1964.

以上の文献の中で Krombein の 1958 a と岩田のものは生態を扱っている。この種はヒメバッコウバチ *Pseudoagenia carbonaria* Scopoli が造るのと同じようなどろのつぼを造り、その中にクモを入れて産卵し、筒穴の中に造巣する他の *Pison* と生態的にもたいへん違っている。

この種はその種小名の示すように初め朝鮮から知られたもので、同地には珍しくない。米軍帰還兵の所有物に造巣したものがそのまま米国へ運ばれ、同地で繁殖し分布を増大しつつあるということを Krombein が報じている。

日本では初め京都から知られ、安松さんの記録された 1 標本も京都で得られたものである。最近の岩田さんの観察も京都市内で行なわれた。それで京都だけがこの種の分布地と思っている人が、いまもいるようである。しかし、私は 1953 年に当地へ来る早々この種を白山山麓の市の瀬付近で多数採集し、その後富樫一次君も少し離れた中宮温泉で 6 ㄱを採集し、この種が北陸地方にもおることが明らかになった。けれども現在までに知られた北陸の産地は、以上の 2 か所に限られているのである。

そういう珍品の種が泰澄寺に住んでいる。恐らく同寺内で造巣繁殖しているものと思われるが、その巣をまだ発見していない。この種の存在がレリクト的であるかどうかは別としても、それがこの寺におるということは注目に値することである。

10. *Pemphredon (Cemonus) diervillae* Iwata アバタアリマキバチ

11. *Pemphredon (Cemonus) lethifer* Shuckard オオグシアリマキバチ

両種とも福井付近の平地では、普通とは言いがたいが、まだレリクト的の価値はない。特に後者は私の家(市内)の庭にはたくさんおって、いろいろな植物の上でアリマキを狩っている。しかし一般的に言えば、両者とも山地種である。

*12. *Psenulus pallipes yamatonis* Tsuneki ヤマトマエダテバチ

山地の社寺の柱やかやぶき屋根には、たくさん住んでいるが、平地の、それも近郊では珍しい存在である。泰澄寺には多数の個体が造巣している。

*13. *Passaloecus roettgeni* Verhoeff シロシタイスカバチ

山間の部落へ行っても、決して多くない種である。それがこの寺にはかなりたくさんおって、その巣の中へアリマキを盛んに持ちこんでいる。

*14. *Stigmus (Stigmus) munakatai* Tsuneki ムナカタエンモンバチ

日本ではスジエンモン *Stigmus (Carinostigmus)* のなかまのホソエンモン *S. (C.) filippovi* Guskovskij は低山帯でも珍しくなく、私は東海道線真鶴の海岸の人家の傍の茂みで 2 ㄱを採ったことがあり、福井付近の少し山手の丘でも採れるのである。ところがホソエンモン *Stigmus (Stigmus)* の類になると、これは全く山地の住者で、平地では見ることはできないのである。そのホソエンモン類の中でも、き

わめて珍しいムナカタエンモンガが泰澄寺にはたくさん住んでいる。私は長年にわたって少しずつ採り、いまでは変異の研究に必要な夥しい数の標本を集めたが、この種はいまでも泰澄寺で最も繁栄している種の1つである。

ムナカタエンモンバチは北海道クッチャン近くの両国村で得られた1♀(棟方明陽君採集)をタイプとして記載された種であるが、その後4頭の♀が宇都宮清住町で得られた(中村和夫君採集)だけという珍種である。宇都宮市内で得られた(現在いるかどうか分らぬ)ということから考えると、あるいはこの種は平地が元来の生息地かも知れないが、いずれにしても決して普通種ではない。なお、この種(♀)の特徴について、記載時にわからなかったいくつかのことを、この機会に追記しておこう。なお♂の記載は別の機会にゆずる。

原記載に肩板の色黒とあるが、これは黒のこともあり、後半が褐色ないし黄褐色のこともある。前単眼は頭を上面から見て中央とあるが、中央よりいく分前のことが多い。しかし近似の *japonicus* などに比べるとずっと後方にあり、中央と言ってもよい程度である。なお後単眼について言えば *japonicus* では両複眼の後縁を結ぶ線は、後単眼の上を通るが、本種ではその前方ないし前線に接して通るのである。なお *jap.* では中胸背前方は *mat* であるが、本種では中胸背全体がよく光る。そこにある2縦溝も彼のより浅い。Clypeus 前方に突出する2齒の形にも多少変異があり、三角形に尖ることと、三角形の先が少し横断されたような不正四角の場合、両者の中間の場合と、さまざまである。また尾域の形も原記載の図と多少違うことがある。大きさは4~6mmである。

この種も黄色のアリマキを捕えてきて、その巣へしきりに持ちこんでいる。

15. *Ectemnius (Hypocrabro) continuus* (Fabricius) ナミギングチ

境内の枯れた切株に造巣していたことがある。一般には山地種である。

16. *Ectemnius (Hypocrabro) schlettereri* (Kohl) イワタギングチ

17. *Ectemnius (Hypocrabro) rubicola nipponis* Tsuneki クララギングチ

これら両種はここへ遊びに来るものようである。

*18. *Lestica (Lestica) collaris* (Matsumura) クビワギングチ

本州では山地でもむしろ少ない本種がここにおったことは、全く意外である。それも早であったから、あるいはこの境内の枯木にでも造巣していたのかも知れない。

*19. *Crossocerus (Coelocrabro) pubescens* (Shuckard) ケブカギングチ

寺内に造巣しているが個体数は少ないようだ。福井県では山地の500m以上の所でないと見られず、それも余り多くない種である。

20. *Rhopalum (Rhopalum: Corynopus) nigrinum* Kiesenwetter チャタテギングチ

この種はこの県では平地でも河岸の堤防や台地のソバ畑などで初秋の候に得られる。この寺の境内で得られたものは恐らく遊飛中のものと想像される。

*21. *Rhopalum (Rhopalum: Corynopus) nipponicum* (Kohl) ニツボギングチ

福井県では小舟渡あたりから奥の谷間の部落でよく見られ、また大野市富田などでは盆地内の田圃の中の農家の屋根などに、以前は住んでいた。福井市では生き残りを見てよいようだ。寺内で繁殖している。

*22. *Rhopalum (Rhopalum: Rhopalum) venustum* Tsuneki コイケギングチ

純粋に山地性の本種がここで繁殖していることは特記されなければならない。しかしその数は多くなく、年々十数頭を認め得るにすぎない。

*23. *Rhopalum (Rhopalum: Rhopalum) hakodatense taichodzi* Tsuneki, subsp. nov. タイチョウジギングチ

ハコダテギングチの新亜種とすべき珍品がこの寺内で繁殖している。個体数は前種より更に少ないようだが、まだ生存し続けている。ハチ屋に狙われたら、ひとたまりもなく絶滅してしまうであろう。ハコダテ

ギングチの原記載は

Rhopalum (*Rhopalum* Sect. *Rhopalum*) *hakodatense* Tsuneki, Akitu, 9 (3.4) : 51, 1960.

で、函館で得られた1♀に基づいて行なわれたが、その後この種はどこからも発見されていない。泰澄寺のものは原種に比べて

(1) 腹柄がやや短く、ずんぐりしている。ハコダテではその最大幅:最小幅=10.5:5.0, 長さ:最大幅=32:10.5; 新亜種では前者は10.0:5.5, 後者は28:10である。腹柄後部のふくらみ方は、ニツポンギングチに類して太く、後方のくぐりはエゾなどに比べて幅広い。

(2) 尾域のくぼみはハコダテでは全体が正中線に向かって弱く傾斜するが、これでは前半中央がやや深く長楕円状にえぐられている。

という違いがある。これによって新亜種を創設したわけである。このハチの狩る prey は小形双翅類である。

24. *Rhopalum* (*Calceorhopalum*) *calceatum* (Tsuneki) クロタビギングチ

この種にも*をつけてもよいように思われるが、しかし福井では、この種はまだ市内の足羽山や八幡山の公園でとれるので、しばらく*を保留することにする。一般的に言えば、この種は明らかに山地種であって、低地では見られないものである。泰澄寺のものが、寺内で繁殖しているかどうか明らかでないが、後方山地から飛来した可能性が強いようだ。ただし、この山(高さ平地より30m前後)と寺との間は現在は広い工場によって連絡をたたれている。

* * *

以上がこの寺のめぼしいハチなかまでであるが、このほかに私がタイチョウキマダラハナバチと仮称している珍奇な寄生蜜蜂がいる。また数年前までは確実に見られ、近年姿を見かけなくなってしまったものに北西の坂地に住んでいたキイロクシケアリ *Myrmica laevinodis* Nylander がある。このアリは完全な山地種で福井県では嵐や小池の山へ行かなければ出合うことのできないものだ。泰澄寺にいれば残存種の筆頭にあげてもよいほどの種だが絶滅したらしいのは残念である。これは近くの工場の従業員が、昼の休時間におおぜい境内へ遊びにくることと、関連しているかもしれないのである。なおアリと言えば多くの普通種に混って、ヨツボシオオアリもおおることを付記しておこう。

タナカマエダテバチの雄発見さる

K. Tsuneki: The male of *Psenulus tanakai* Tsuneki

Closely allied to *P. pallipes yamatonis* Tsuneki, differing from it in the following characters: (1) Flagellar joints of antennae longer, more markedly so at the apical joints, (2) punctures on mesonotum finer and sparser, (3) punctures on abdomen larger and more distinct, (4) longitudinal striae on posterior margin of mesonotum longer, stronger and more distinct, (5) hind tarsi darkened on basal half.

今夏南部敏明氏より、同氏が埼玉県西部山地の太陽寺で採集したマエダテバチの送付をうけ、検した結果、これが現在まで未知であったタナカマエダテ *Psenulus tanaki* の♂であることが明らかになった。同氏によると、この種は同地に多産する由で、更に1♀9♂の寄贈をうけて変異を調べた結果、最も近似する(私の検索表ではそこへ行く) *P. pallipes yamatonis* (ヤマトマエダテ)と、次の諸点で区別できることがわかった。

(1) 触角鞭節がより長く、特に前半部でより明瞭、(2) 中胸背の点刻がより細かく、より疎らである、(3) 腹背の(特に第3,4節で)点刻がより大きく、より明瞭である、(4) 中胸背後縁部の縦条がより長く、より強い、(5) 後付節は基半部で黒味が強い。

(常木勝次)